# 自己評価計画

石川県立田鶴浜高等学校

| 重点目標 | 具体的取組 | 主担当 | 現　　状 | 評価の観点 | 実現状況の達成度判断基準 | 判定基準 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 高い専門知識と深い生徒理解に裏打ちされた教育実践に取り組めるよう、教師の資質向上に努める。 | ① 生徒理解に根ざした授業実践に向け、研究授業・公開授業、指導案検討会等を実施し、授業力向上を図る。 | 教務 | 自ら意欲的に学習する態度が身に付いていない生徒がおり、予習・復習の定着など学習習慣の確立が必要である。 | 【成果指標】<br>わかる授業により学習意欲が湧き、学習習慣を身に付けている。 | 「授業はわかりやすく工夫されている」と評価した生徒の割合が<br>Ａ　８０％以上<br>Ｂ　７５％以上<br>Ｃ　７０％以上<br>Ｄ　７０％未満　である。 | Ｃ以下の場合は指導方法を再検討する。 | 生徒による授業評価を前後期の２回実施する。 |
| | ② 教師としての資質向上を目指した職員研修会を実施する。 | 総務 | 看護、福祉への志望の目標実現のためには、多様化した生徒個々への継続的な支援が必要である。 | 【満足度指標】<br>研修会の内容を理解し、資質向上につながる。 | 研修会の内容を理解した職員の割合が<br>Ａ　１００％<br>Ｂ　９０％以上<br>Ｃ　８０％以上<br>Ｄ　８０％未満　である。 | Ｃ以下の場合は実施方法の再検討をする | 年２回実施し、毎回アンケート調査をする。 |
| 2 個に応じた学習指導により､看護師・介護福祉士国家試験合格率１００％を目指す。 | ① 専門教科の知識・技術の確実な定着を図るため、到達レベルに達するまで補習・個別指導を実施する。 | 衛生<br>看護科 | 定期考査及び国家試験演習で、本校が目標としているレベルに達していない生徒がいる。 | 【成果指標】<br>＜高校＞<br>定期考査で専門教科の評点が60点以上の生徒がクラスの70％以上である。<br>＜専攻科＞<br>国家試験演習で合格の目安である偏差値38未満の生徒が0人である。 | ＜高校＞<br>60点以上の生徒の割合が<br>Ａ　８０％以上<br>Ｂ　７０％以上<br>Ｃ　６０％以上<br>Ｄ　６０％未満　である。<br>＜専攻科＞<br>偏差値38未満の生徒の割合が<br>Ａ　０人<br>Ｂ　１人<br>Ｃ　２人<br>Ｄ　３人以上　　である。 | ＜高校＞<br>Ｃ以下の場合は指導方法の再検討をする。<br>＜専攻科＞<br>Ｂ以下の場合は指導方法を再検討する。 | 生徒全員が目標に達するまで考査後も個別指導を継続する。<br>模試結果を個別、科目別に分析し指導を継続する。 |
| | ② 習熟度が一定レベルに達するまで、個別指導を実施する。 | 健康<br>福祉科 | 成績の評点及び国家試験演習で、一定レベルに達していない生徒がいる。 | 【成果指標】<br>＜1､2年生＞<br>成績の評点で専門教科が60点以上の生徒がクラスの70％以上である。<br>＜3年生＞<br>国家試験演習のクラス平均得点率が70％以上である。 | ＜1､2年生＞<br>60点以上の生徒の割合が<br>Ａ　８０％以上<br>Ｂ　７０％以上<br>Ｃ　６０％以上<br>Ｄ　６０％未満　である。<br>＜3年生＞<br>クラスの平均得点率が<br>Ａ　８０％以上<br>Ｂ　７０％以上<br>Ｃ　６０％以上<br>Ｄ　６０％未満　である。 | ＜1､2年生＞<br>Ｃ以下の場合は指導体制や内容の検討を行う。<br>＜3年生＞<br>Ｃ以下の場合は面談を実施し、意欲の喚起を促す。 | 全生徒がレベルに達するまで、指導を継続する。 |

| 重点目標 | | 具体的取組 | | 主担当 | 現　　状 | 評価の観点 | 実現状況の達成度判断基準 | 判定基準 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ３ | 地域の医療機関・福祉施設等を支える人材育成について、本校の大きな役割や高い実績の啓発に努め、志願者の増加に繋げる。 | ① | 本校志願者の増加を図るため、説明会や出前授業等等を開催する。 | 総務<br>教務<br>健康<br>福祉科 | 本校の看護・福祉教育の意義と役割を啓発する必要がある。 | 【満足度指標】<br>説明会や出前授業参加者が、本校の教育や看護・福祉に対して理解を深めた。 | 説明会や出前授業参加者が「本校への理解を深めた」と回答した人数の割合が<br>Ａ　９０％以上<br>Ｂ　８０％以上<br>Ｃ　７０％以上<br>Ｄ　７０％未満　である。 | Ｃ以下の場合、開催時期や説明内容について検討する。 | 説明会終了後にアンケート調査を行う。 |
| | | ② | 看護に対する関心を高めるため、中学校の文化祭や地域での健康チェックを実施する。 | 衛生<br>看護科 | 地域における本校衛生看護科への期待と需要が増加している。 | 【満足度指標】<br>健康チェックを受けた参加者が、本校の看護教育に対して理解を深めた。 | 「本校の看護教育に対して理解を深めた」と回答した人数の割合が<br>Ａ　９０％以上<br>Ｂ　８０％以上<br>Ｃ　７０％以上<br>Ｄ　７０％未満　である。 | Ｃ以下の場合、実施方法を再検討する。 | 健康チェック実施後、アンケート調査を行う。 |
| ４ | 部活動やボランティア活動等の課外活動を推奨し、心身の調和的な発達並びにコミュニケーション力向上を図る。 | ① | 部活動を推奨する。 | 生徒会<br>部顧問 | 全員部活動に加入しているが、実際にあまり活動していない生徒もいる。 | 【満足度指標】<br>個々の生徒が部活動に積極的に参加する。 | 個々の生徒が部活動に参加する割合が<br>Ａ　９０％以上<br>Ｂ　５０～９０％<br>Ｃ　２５～５０％<br>Ｄ　２５％以下　である。<br>※３年生は総体・総文まで | Ａ＋Ｂの合計が75％未満であれば再検討する。 | ７月・１月にアンケートを実施する。 |
| | | ② | 健康チェック、ボランティア等の活動を行い、自ら他者と関わる機会を増やす。 | 衛生<br>看護科 | 奉仕活動を自主的に行えていない生徒が多い。 | 【成果指標】<br>ボランティア参加回数が、高1、2年は5回以上、高3、専1は3回以上、専2は2回以上となった生徒が70％以上である。 | 各学年の目標を達成した生徒の割合が<br>Ａ　８０％以上<br>Ｂ　７０％以上<br>Ｃ　６０％以上<br>Ｄ　６０％未満　である。 | Ｃ以下の場合、ボランティアに自主的に参加できるよう導く。 | ボランティア活動の状況を年２回調査する。 |
| | | ③ | ボランティアを通して生徒が多くの方と関わりをもつ機会を増やす。 | 健康<br>福祉科 | コミュニケーションに苦手意識がある生徒が多い。 | 【成果指標】<br>ボランティアを行うことによりコミュニケーション力が向上したと評価した生徒が70％以上である。 | ボランティア経験後の自己評価結果が初回の自己評価より良くなっている割合が<br>Ａ　８０％以上<br>Ｂ　７０％以上<br>Ｃ　６０％以上<br>Ｄ　６０％未満　である。 | Ｃ以下の場合はコミュニケーションに関する個別指導を行う。 | ２ヶ月毎にアンケートを実施する。 |